

もくじ

はい、文化財係です46 武蔵千葉氏と中曽根城… P1

十二年ぶりの復活 足立二丁目の庚申祭… P3

お化け煙突60年追録②… P4

中曽根城址（中曽根神社）



足立史談

第684号

2025年2月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集部

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

はい、文化財係です 46

武蔵千葉氏と中曽根城

文化財係



■はじめに 足立区登録記念物（史跡）

「中曽根城」は、武蔵千葉氏という一族が拠点の一つとした城です。中曽根神社（本木二一五七七）を中心に、南北二五〇メートル、東西四〇〇メートルほどの規模を持つ城郭でした。現在は、開発が進み目立った遺構は残っていませんが、発掘調査によって濠堀（ほり）跡をはじめとする様々なものが出土しています。そこで今回は、武蔵千葉氏と中曽根城についてご紹介します。

一 武蔵千葉氏

■千葉氏 千葉氏は、下総国千葉郡の千葉荘（現在の千葉県千葉市）を拠点とする一族です。桓武平氏の流れをくむ名族で、鎌倉時代に千葉常胤が源頼朝に従い、勢力を拡大しました。その結果、代々、千葉氏は下総国の守護に任命されました。

■千葉氏の分裂 一般的に、応仁の乱（一四六七～七七）から戦国時代が始まるとされますが、関東では享徳の乱（一四五四～八二）を幕開けにして、戦国時代に突入します。

享徳の乱は、三〇年近く続いた大乱で、京都の将軍家に反抗的な関東公方足利成氏と、関東公方を補佐する関東管領上杉氏が対立したことに起因し、関東全体が戦場となりました。

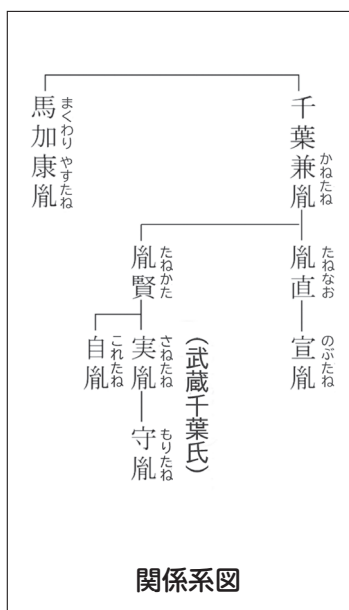
この大乱の中、千葉氏も

関東公方と関東管領のいずれに属するかで内紛が生じます。そして、康正元年（一四五五）に千葉氏の主流で関東管領派だった千葉胤直・胤胤親子が胤直の叔父で関東公方派であった馬加（まか）康胤（かなたね）によって、自害に追い込まれてしまいます。その結果、主流と傍流が入れ替わり、馬加康胤の系統が千葉氏を継承していくことになりました。

■武蔵千葉氏の成立 馬加康胤の攻撃により、千葉胤直の弟胤賢も自害しています。そのため、胤賢の子である実胤・自胤兄弟が馬加康胤を討つべく立ち上がります。

しかし、兄弟は苦戦し、下総国から武蔵国へ逃亡しました。兄弟は名將として名高い太田道灌の支援を受け、実胤は赤塚城（板橋区）、自胤は石浜城（荒川区）を拠点とし、下総国への復帰を目指します。

結局、兄弟の宿願は果たされず、寛正三年（一四六二）、実胤は美濃国へ隠遁して消息不明となり、自胤が跡を継



ぎますが、明応二年(一四九三)に自胤も死去してしまいます。その後、自胤の跡を実胤の子守胤が継ぎました。実胤・自胤・守胤と続く系統を武蔵千葉氏と呼んでいます。

二 武蔵千葉氏と中曽根城

■中曽根城と「淵江」 中曽根城は、一五世紀後半～一六世紀初頭に、下総復帰のための活動拠点の一つとして武蔵千葉氏が整備したと考えられます。

永正一七年(一五二〇)、千葉守胤と千葉氏の遠縁にあたる東常和(とうつねかず)が、当代随一の文化人として知られる京都の公家三条西実隆に和歌の批評を求めています。この時、二人がどこにいたのかは不明ですが、その三年後、再び東常和が「淵江」から三条西実隆に和歌の批評を求めています。「淵江」は、本木・花畑・伊興などを含む広域地名として、当時用いられていました。

これらのことを踏まえると、永正一七年に千葉守胤がどこにいたかは不明ですが、おそらく守胤も東常和同様に「淵江」にいたと推測されます。そして、淵江の中で武蔵千葉氏が拠点とする場所は、中曽根城しか考えられません。

■所領の分布 十六世紀初頭、小田原(神奈川県)を拠点とする戦国大名の北条氏が勢力を拡大していました。そして武蔵千葉氏は北条氏に従属すること、家名の存続を図ります。

永祿二年(一五五九)に成立した「小田原衆所領役帳」は、北条氏に従う人々の所領を列記したもので、武蔵千葉氏の所領も記されています。武蔵千葉氏の所領として筆頭に記されているのは、千葉実胤が入部した赤塚城の周辺(「赤塚六か村」)ですが、他に列記されているのは「淵江」をはじめ、「沼田村」「伊興村」「保木間村」「寺(千)住村」など、現在の足立区域内が全体の六割以上を占めています。こうしたことから、現足立区域が武蔵千葉氏の有力な拠点の一つだったことは間違いありません。

■中曽根という場所 中曽根という地名は、江戸時代になってから確認できるものです。戦国時代に中曽根城がなると呼ばれていたのか不明ですが、淵江城と呼ばれていたかもしれません。

ところで、「そね」(曾根・曾櫛・曾尼など)という地名は、周囲より少し高い丘のような場所(自然堤防)に用いられることが多く、全国的に分布しており、中曽根は「そね」の中央であることを意味しています。すなわち、中曽根城のある場所は防御に適した城を築くのにちょうどいい場所となりました。

ちなみに「新編武蔵風土記」は、中曽根に「ナカヅネ」とルビを振っています。

■中曽根神社の由緒 中曽根神社は、昭和七年(一九三二)に、妙見社と興野にあった雷神社を合祀して創建されました。

妙見は、北極星・北斗七星を信仰するもので、千葉氏が篤く崇敬し、千葉氏の家紋月星の由来となっています。千葉氏がいたところには必ずといっていいほど妙見社が祀られています。中曽根神社には、江戸時代の絵馬が残されており、妙見社に参詣するたくさんの人々にぎわった様子が描かれています。

三 発掘調査と武蔵千葉氏の滅亡

■江戸時代の中曽根城址 中曽根城の存在は、『新編武蔵風土記』に「コ、ニ又千葉某ノ城蹟ト云所アリ。六丁四方許。外構ノ堀。及ビ土居ノ蹟ノミ残レド。其内ハ今畑トナレリ」とあり、江戸時代にはわずかながら堀(濠)や土居(土塁)の痕跡が残っていたようです。しかし、それからさらに時代を経て、中曽根城の実態はわからなくなっていました。

■発掘調査 そうしたなか、平成六年十二月、白元足立ビル(本木二一四)の建設に伴う発掘調査の際、長さ一九メートル、幅七メートルにも及ぶ巨大な濠跡が確認されました。また、中世の井戸跡や、曲輪(くるわ・※城の防御区画)と曲輪をつないだとみられる橋脚の跡も見つかりました。これにより、中曽根城の存在があらためて注目されるようになったのです。

■縄張の復元 縄張は、城の曲輪や堀

(濠)などをどのように配置するかといったプランのことです。中曽根城の正確な縄張は不明ですが、近代まで残されていた用水路や、東京都が実施した地底レーダー探査などによって、縄張りが推測されています。

その結果、西側の曲輪にクランクが多く、敵の側面から矢を射やすくなっていた様子などが指摘されています。また、中曽根城の周辺には、「小屋の内手(うちで)」や「出戸(でと)」など、城と関係のある地名も伝承されており、城の縄張を考える参考になっています。

■武蔵千葉氏の滅亡 北条氏は天正一八年(一五九〇)に羽柴(豊臣)秀吉によって滅ぼされてしまいます。武蔵千葉氏は守胤以降も数代続きますが、北条氏と運命を共にしました。こうして、一〇〇年以上にわたり、足立区の一部を支配していた武蔵千葉氏は滅亡したのです。発掘の結果、中曽根城は、一六世紀後半に廃城になったと推測されています。この結果は、武蔵千葉氏の滅亡の時期と重なっています。

これまで中曽根神社には、中曽根城の文化財説明板がありませんでしたが、中曽根神社および氏子の方々のご理解を得、三月に新設いたします。これを機に、ぜひ現地を訪れてみてはいかがでしょうか。

(佐藤貴浩 文化財係学芸員)

十二年ぶりの復活 足立二丁目の庚申祭

問所瑛史



【写真1】庚申祭の様子（足立2丁目31）

昨年十二月二十二日、足立東町会の会員を中心に庚申祭がおこなわれました。本稿では庚申祭の様子を紹介し

ます。庚申信仰とは道教に由来する信仰です。庚申（かのえさる）は十干十二支の組み合わせを日にちにあてはめたもので、六十日に一回めぐってきます。この日は人々が集まって夜通し寝ずに過ごす庚申待（こうしんまち）がおこ

なわれました。庚申の日は正々堂々と夜更かしをできる日でもあり、江戸時代になると民衆の間で流行しました。庚申講では記念としてしばしば庚申塔と呼ばれる石塔が建立されました。

■足立東町会内の庚申塔 足立東町内

には足立二丁目三十一番地①と三十六番地②に庚申塔が建立されています。

①の庚申塔は安永九（一七八〇）年に五反野村講中の十二人の施主によって建立された二基です。「足立区旧町村古道図」を確認すると、古道の脇に位置しており、西五反野耕地と沼田耕地の境界沿いにあることがわかります。

②の庚申塔は寛政八（一七九六）年に十四人の施主によって建立されたものと文久二（一八六二）年に二十四人の施主によって建立されたものです。明治時代の迅速図を確認すると、庚申塔が建てられている道（【図1】の着色した道）が存在し、古くからある辻に建てられたものと考えられます。辻に建てられたものには魔除けの意味もあったと考えられます。

■庚申祭の概要 当日は十時四十分頃に①の庚申塔の向かいにある消防団の格納庫の前で、五反野祭囃子保存会の会員によって一回目のお囃子が演奏されました。十時五五分に二回目の演奏がおこなわれたあと西之宮稲荷神社の二名の神職が到着し、幣束や榊が供えられました。十一時になると、神職によって祝詞

の奏上がおこなわれました。祭礼に参加した十四名の町会の人達は厳かに礼をして祝詞を聞いていました。その後、参加者一人一人が神職から受け取った玉串を奉納し拝礼をしました。①の庚申塔での神事が終了すると、徒歩で②の庚申塔に移動しました。②の庚申塔の向かいにあるプチテラスの前でお囃子の演奏がおこなわれました。演奏が終わると、①の庚申塔と同様に祝詞の奏上と玉串拝礼がおこなわれました。最後に送り囃子が演奏され、庚申祭は終わりました。その後、足立東町会館に集まり、昼食を兼ねた直会（なおらい）が開かれました。直会では、お酒や仕出しの弁当を食べつつ、昔の庚申祭の様子を回顧したりとてもにぎやかな雰囲気でした。



【図1】足立東町会内の庚申塔
（足立2丁目付近）

の奏上がおこなわれました。祭礼に参加した十四名の町会の人達は厳かに礼をして祝詞を聞いていました。その後、参加者一人一人が神職から受け取った玉串を奉納し拝礼をしました。①の庚申塔での神事が終了すると、徒歩で②の庚申塔に移動しました。②の庚申塔の向かいにあるプチテラスの前でお囃子の演奏がおこなわれました。演奏が終わると、①の庚申塔と同様に祝詞の奏上と玉串拝礼がおこなわれました。最後に送り囃子が演奏され、庚申祭は終わりました。その後、足立東町会館に集まり、昼食を兼ねた直会（なおらい）が開かれました。直会では、お酒や仕出しの弁当を食べつつ、昔の庚申祭の様子を回顧したりとてもにぎやかな雰囲気でした。

庚申祭は戦前からおこなわれていましたが、戦争の影響で一度断絶しました。その後、昭和三十年代に有志によってお囃子の講習会が開かれ、庚申祭も復活しました。庚申祭は平成二十四年以降途絶えていましたが、今回、十二年振りに復活しました。

今年は二〇二四年最後の庚申の日である十二月二十二日におこなわれましたが、以前は庚申の日にこだわらず十二月の日曜日の昼間におこなっていたそうです。戦前の祭礼がどのようなものであったのかは不明ですが、昭和三十年代には、祭礼の日が江戸時代のような庚申の日の夜でなかったのには、庚申待がおこなわれなくなった後に「庚申祭」として、時代に合わせた新たな祭礼が創出されたためと考えられます。

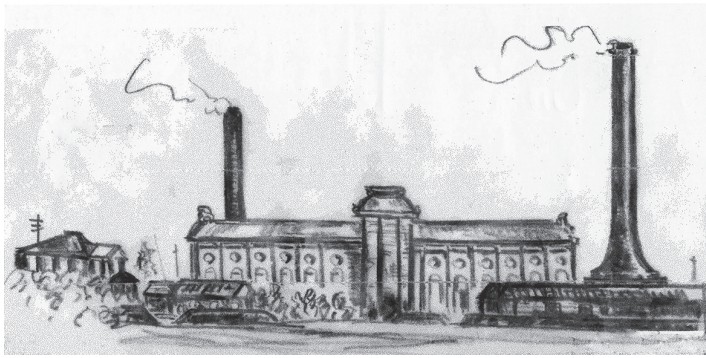
■おわりに 地域の祭礼は、地域の歴史や文化を知り、地域の結束を図る役割を果たします。昨今、少子高齢化や新型コロナウイルスの流行により地域の祭礼の中止が相次ぐなかで庚申祭の復活は明るいニュースです。末永く祭礼の継承が続くことを期待します。

（郷土博物館専門員）

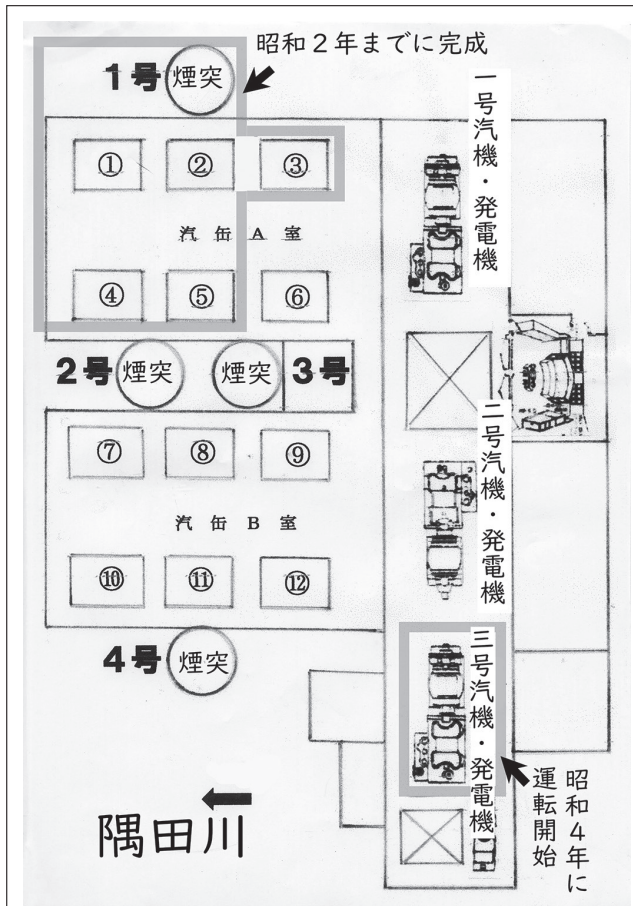
お化け煙突60年追録

②

千住発電所と
千住火力発電所
格和宏典



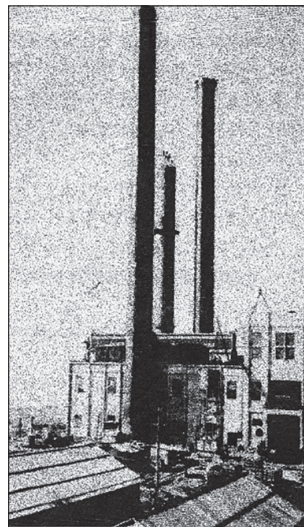
千住発電所のイメージ図



発電所内部と建設・運転開始時期

大正15年当初の完成運転は、枠線外の一号・二号汽機・発電機、2～4号煙突、⑥～⑫汽缶。

■千住発電所 明治三十九年、東京電燈株式会社は、南千住に合計出力四千五百kwの火力発電所を建設しました。この発電所は、蒸気の圧力でシリンドアのピストンを動かし、その運動で動力を得る蒸気機関方式から蒸気を羽根車に当て、液体のエネルギーを回転運動に変換して動力を得る蒸気タービン方式を採用しました。構内に電気製品関係の工場



建設中の2号煙突

隣りは3号、手前は4号煙突。

棟を敷設し、電線・変圧器などの製作、修理を行ったといひます。また、構内には、使用した蒸気を復水とするための冷却水取水・排水路(石炭搬入水路との説もある)があり、地元民は、電

灯堀と呼んでいました。その後、水力発電所の拡充による受給調整の結果。大正六年(一九一七)に廃止されました。

■千住火力発電所 千住火力発電所については足立史談で紹介しましたので、建設について述べてみたいと思います。発電所の構造および煙突設計は内藤多仲(ないとう・たちゅう)氏が行い、大正十三年(一九二四)に造成工事が終わり、十四年に本館完成、十五年に一・二号汽機(タービン)・発電機が営業運転を開始したということで、かなりの突貫工事だったようです。残念ですが、建設時の資料は煙突の写真のみで、建設してい

るのは2号煙突です。平面図と合わせるとよく分かります。※内藤多仲氏は東京タワーの設計者でもあります。

十四年末には、汽缶(ボイラー)も⑥号缶から⑫号缶までの七缶と煙突三本、一号汽機・発電機の据え付けが完了しました。

ここで読者は、「1号煙突や①号から⑤号までの汽缶が出来ていないのに、なぜ一号汽機・発電機が動くのだろうか?」と思われるかと思いますが、

ごもつともな疑問ですが、千住火力発電所は各汽缶で作られた蒸気をスチームレシーバー(蒸気溜め)に集め、そこから各汽機に送って発電するため、どの汽機・発電機でも動かすことが可能だったのです。これを「多機多缶式」といいます。

一号汽機・発電機が大正十五年一月、二号汽機・発電機が四月に運転を開始し、出力五万kwの第一期工事が終わり、残りの1号煙突と、①号から⑤号までの汽缶は昭和二年八月までに完成しました。

さらに、三号汽機・発電機の建設を進め、昭和四年四月に運転を開始し、総出力七万五千kwの新鋭火力として東京の五分の一の電力をまかなう威容を誇る発電所が誕生したのです。

元千住火力発電所所員